

「遊び」雑感 その三

お正月の遊び

吉村 真理子

現代人にとって新しい年を迎える実感は薄れた
とは言え、日本中の子どもにとってのお正月はそ
れぞれの地方色を加味して嬉しく楽しいものにな
っている。その理由の一端はお正月独特の遊び
にあるのではなからうか。今も園内でよく見られ
るお正月遊びを例にそのことを考えてみたい。

かるた遊び

冬休みがあげて登園した子どもたちは「おめで
とう」のあいさつを終えると「新しいカレンダー
だ」「今年はさるとしだよ」「うちにもこういうお
もちかざってあるよ」と保育室を見回し、用意し
てあるかるたを見つけると「これしよう」とたち



まち五、六人の輪ができる。年長児はほとんどの子どもが文字を読めるようになっていたので、「わたしが読むからね」という読み手の声に耳をすませ取り札の上に素早く目を走らせているが、実際に見ているのは言葉の内容をあらわす絵であり、似通った絵の正否を確認するときだけ文字を見ているようだ。これは文字が記号であることを認識しているからであろう。絵があれば文字の読めない子どももかるた遊びを楽しめるので、三、四歳児が幾人か交ざっていることもある。この子どもたちはお正月休みに家族でかるた遊びを経験しその面白さを知っていたのであろう。回を重ねて三歳のMちゃんが待ち構えているロボットの札が読まれると、年長児たちは誰も手を出さずMちゃんが得意満面で取る様子をにこにこ眺めている。こんな姿からも家庭で大人といっしょに遊んだ様子が想像されて微笑ましい。

かるたの読み札は調子の良い七五調や八五調が多いのですぐに覚えてしまい、同じ絵に別のことばをつける遊びが誕生した。例えば「さくらがさいたらいちねんせい」という札にはさくらの木の下にランドセルを背負った三人の子どもが描かれている。これに「さんにいっしょにいちねんせい」「さくらのはなはきれいだな」などという言葉をつけて「これでもいいよね」とおもしろがっている。しまいには会話まで「きょうのおやつはなんだろう」「ぼくしってるよドーナツ」「わたしドーナツだいすきよ」などと指を折って数えながら楽しんでいる。リズムミカルな言葉の調子がよほど気に入ったとみえる。

当然次にできたのは「かるたをつくってみたい」という要求で、各自が思いついた名文句とそれに見合う絵を描いてみることにした。四七文字揃わなくてもダブっていても現代詩のようであっ

でもそれなりに言葉のおもしろさを満喫した数日間であつた。出来上がったからたで遊ぶ段になると、みんな他の子のものには関心はなくひたすら自分の描いた札を見つめ、順番がきて読まれると満面の笑みを浮かべて得意そうに取っている。結局、みんな自分の札だけ回収したことになり、何度やっても同じでおかしかった。それだけ自分で考えて作った過程が心に強く残っていたのだと思う。

こうした子どもの姿を見ていると、かるた遊びは単に文字を覚えるためなどという単純なものではなく、言葉の根を掘り起こし豊かな言葉の世界へ導く窓口であつたことに気付かされた。私も子どももの頃、お正月に家族みんなで百人一首をしていたことを思い出す。字札ばかりで、ことばの意味も全くわからなくても短歌を読む調子の美しさと家族それぞれの取り方や反応のおもしろさにあ

きることがなかった。まだ小学生の兄たちは大人が上の句で取るのをくやしがり、いくつかの句を覚えて自分の前に並べて待ち構えている。ちょうど子どもが自分のつくった札を他人に取られまいとしたように。そのとき大人はやはりその札を取らないよう配慮していた。子どもへのサービスに「いろはかるた」(注「犬も歩けば棒に当たる」「論より証拠」などのことわざを集めた庶民の処世訓で取り札に絵があり子どもも楽しめた)の相手もよくしてくれた。当時はやはり意味は分からなかったが簡明な言葉はすぐ覚え、「ほら、おなべの絵」(われなべにとじぶた)などとヒントをもらって何枚か取るのが嬉しかった思い出がある。

後になって思えばこれらの遊びは教養の基礎で、百人一首は学生時代に短歌をつくらされたときのことばのリズムや言い回しの参考になつたば

かりでなく、文学的なものの見方や感情表現に親しむこともできたように思う。

凧あげ

風のある晴れた日に保育者が庭に出て凧をあげ始めると「ぼく、お父さんと凧あげしたんだよ」「ぼくにも持たせて」と子どもたちが集まってくる。用意していた既製の凧が足りなくなると「わたしたちも凧をつくりたい」という声があがる。初めのうちは簡単にできるビニール凧やハガキ凧を作って遊んでいたが、年長児は壁に飾ってあるような「本物の凧を作りたい」といつてくる。そこで和紙や竹ひご、凧糸を出してくると「わーほんものだ」とひとしきり歓声があがる。和紙に絵の具で思い思いの絵を描き始める頃には緊張感が保育室にみなぎってきた。

竹ひごを結び合わせて和紙に貼る段階になると

大人の手助けが必要になり、バスの運転手はじめ園長、主任や用務員まで駆り出されるがみんな喜んで手伝っている。バランスをとって糸をつけてもらうと子どもたちは待ち兼ねたように外に飛び出して走りだす。「ねえ、くるくる回ってしまなんだよ」「ぜんぜん上がらないんだけどどうしてだ?」「枝にひっかかって破れちゃった」と次々に訴えてくる子ども相手に助っ人は修繕屋に早変わりで大忙しである。それでもぐんぐん上がる凧



の魅力は抜群で、みんな夢中でいろいろ試している。誰かがしつぽのついた凧の写真を見つけると早速紙を長く切って貼り付け、「長すぎるよ」「そんな短いじゃだめ」などと大騒ぎ。そのうち凧の方向に気が付いた子どもが「こっちから走った方が上がるよ」と知らせている。

昼食の後もすぐに凧を持って外に出て上げ方の工夫に余念がない。上がった凧が増えてくると今度はからまった糸を解きほぐすのに職員はおおわらわ。お迎えの時間になると「ねえ、もってかえっていいでしょ。団地の広場で上げて見るの」「パパに見せるんだ」と大事そうに抱えて帰る子どももいた。

次の朝、昨日子どもが帰った後、子どもたちを驚かせようと職員みんなで作った連凧を上げていると登園してきた親子が歓声をあげて眺めている。凧熱は父兄にも感染し、洋凧を作って「今日

は仕事休みなんですよ」と上げにきてくださったり、出勤途上に立ち寄って子どもといっしょに凧あげを楽しむ方もあった。町中では凧を上げるスペースも少なくなり、空にいくつも凧が上がっているお正月らしい風景が見られなくなったのはさびしい。

考えてみれば、さきのかるた遊びが文系であるとしたら凧あげは理系の遊びと言うこともできよう。凧の均衡を保ちながら高く上げるには、紙と竹ひごの太さ、重さのバランス、糸をつける角度、リボンのような足をつける効用、凧の方向などの力学的知識を必要とするにもかかわらず、試行錯誤を重ねることで（私たち大人も同様であるが）なんとなく体で覚えていくのはすばらしい。

小さい子どもは立ち止まると凧が落ちてしまうので懸命に走る様子がかわいい。冷たい外気の中を走り回るのだからかなりの運動量になるのはた

しかで鼻の頭に汗をかいている。

羽根つき・まりつき・こま回し

同じように運動量の多い遊びといっても全身運動というより巧緻性が求められるものに羽根つきやまりつき、こま回しなどがある。幅の狭い羽子板を落ちてくる羽根に当てるのは難しく、いくつ続けられるかが目標となる。まりつきも同じで不安定なはねかえりにタイミングを合わせるのが難しいが、それだけに記録が伸びるのがうれしくて熱心に練習を重ねている。

こま回し名人と呼ばれる子どもはみんなの尊敬の的になるが、たいてい兄から技術を教わっているようだ。こま回しの場合コーチはほとんど男性職員で、みんなの前であざやかな手つきで回して見せると一斉に拍手が湧き、「すごい」と一躍人気者になる。気をよくした男性職員はマンツ

マンでいてねいに紐の巻き方や引き方を手を添えて指導してくれるのでたちまち上達する子が続出している。

手ひねりで回せるこま作りの魅力は、軸の長さと同転板の大きさ、形、取り付ける高さをそれぞれ実験してよく回る条件を発見するおもしろさであろう。それとランダムに彩色した同転板が回ると全く異なる色や模様になることが不思議でいろいろと試して見ている。こう見ていくと、こまや凧を作る過程は科学的な思考過程そのものであり、既製のこまで技術を磨くと同時に手作りごまのおもしろさも見逃せない。



お正月の遊びの特性

園での子どもの様子を見てみると「もういくつ寝るとお正月」の歌の文句をそのままに、かると、すぐろく、凧あげ、追い羽根、まりつき、こま回しなど昔からの遊びは今も魅力を失っていないようである。これらの遊びは内容のおもしろさにもかかわらず、なぜか他の季節にはほとんど見られずお正月限定であることが興味深い。おそらく、昔はお雑煮やお節料理のように「はれ」の日の特選遊びメニューだったのだろう。普段の遊びと違ってお正月の遊びはすべて道具が用いられるのも特徴だ。それも博物館などに展示されている公家の姫君の嫁入り道具に歌留多や双六が入っているのを見れば、もとは宮中で貴族たちの遊びであったことが窺える。当時の文化が遊び道具を通じて伝えられたものの、日頃は玩具が買えなかった貧しい庶民にとって、購入されたかたや羽子

板は日常使うにはもったいなく、お正月にだけ許された特別な遊び道具だったのではなかるうか。それだけに使う喜びもいや増したにちがいない。

また、お正月ばかりは仕事から解放された大人がいつしよに遊んだことも季節限定の要因ではなかつたろうか。祖父母、父母、兄弟といつしよに遊べた子どもはどんなに嬉しかったことだろう。同じ遊びをすることでさまざまな文化が伝わってきたのだと思う。

お正月の伝統行事に対しての関心が薄れ、家庭からもそうした風習が消えつつある昨今であるからこそ、幼稚園や保育所では子ども時代の思い出にとびきりすてきなお正月を演出してやりたいと思う。それも凧上げやかると、こま回しなどを一月の保育内容にとりあげるだけでなく、それぞれの遊びの意味を考え、伝承されてきた文化の豊かさを現代に活かして伝えてやりたいものである。